



WORKS



—歩く旅の仲間達—

sayoka

憎悪の事件

今から、3年前の話。

第18人目国王、ユラジア・ルラサンガラ・フレイシアの治めるフレイシア王国に、憎悪の反乱が起きた。

かつてないほどの強い民の怒りに、歴史あるフレイシア城は焼き払われた。

国民たちの憎悪の矛先は、国王ユラジア。

その反乱は、1人の兵士の国中に張り巡らされた半紙にあった。

『行方不明になった家族、友人はもう帰ってこない。

国王は、城で感情移植という恐ろしい実験を我らの大切な人で試している！

こんなことが許されてはならない。

現国王ユラジアに民の怒りを！』

それが春の出来事だったなら、国民は張り出した兵士を愚か者と笑っただろう。

しかし、実際に国民の中では、夏ごろから行方不明者が続出していた。

加えて家族、友人がいないというのに真面目に探してもくれない国兵に怒りと不満を感じていた

。

そして、その兵士の言ったことは、嘘ではなかった。

ユラジアは、城の学者と共に魔法を使った感情移植の実験を、国民を使って試していた……。

その半紙は、国民の怒りを暴発させる理由となった。

—フレイシア城—

「国王！西の門まで火が回っています！」

「……っ！出口はないのか！」

国王ユラジアは、自分を囲う炎と今の兵士の報告に恐怖を感じた。

「国王……このままでは長年の実験も無駄に……！」

弱弱しいその声は、城の学者代表、シマルからだった。

「くそっ！今までの時間が……！」

齒軋りをして呟いた国王は、隣で震えるシマルを見て・・・
自分が、助かる方法を思いついた。
焦りに汗がたったその顔を、にたりと歪ませた。

「なあシマルよ。」

「・・・はい？」

「お前は、肺の病気を持っていたな。」

「・・・？はい・・・火の煙が苦しくて・・・。」

震えるシマルの声を聞きながら、国王はゆっくり腰の剣を抜いた。

「こっ国王！！」

「シマル、お前はたいした部下であった。そして気の合う友だった・・・。」

「何をっ・・・！」

後ずさるシマルを、恐怖に駆られながらも追い詰める。

「お前は良い働きをした・・・よって、ここで永遠の休息を与えよう。」

剣が大きく振りかぶられる。

「国王！ここで私を殺して何の得も！」

「なに、死後の世界に少し罪を背負っていけばよい。」

シマルが反論するより先に・・・振りかぶった剣は、勢いよく振り下ろされた。

「国王、報告が・・・！」

勢いよく扉を開けた兵士が見たのは・・・

剣を片手に、学者シマルを抱えた濃国王ユラジアだった。

「学者シマルを、この事件の発端者として罰した！兵を挙げ、全力で国民を広場に集めろ！」

「は、はい！」

国王のいつもより重い威厳に恐怖を煽られつつ・・・

兵士は大声で叫びながら、部屋から出て行く。

「最後までいい働きをしてくれた・・・シマルよ。」

誰もいない、炎の上がる部屋の中で。

誰よりも恐ろしい顔で・・・国王、ユラジアは笑った。

まだ怒りの燻ぶる心中でなんとなく広場に集まった国民は、

大犯罪者、シマルを抱えた国王の話で静まった。

人体実験をしたシマルの愚かさと自分の無実を語る国王。

誰も国王が事件の首謀者とは知らず・・・

衝撃と無実の国王を襲った罪悪感の中で、国民は国王の提案を呑んだ。

「シマルの罪を、許すわけにはいかない。しかし・・・

君たちの憎悪は、城を一つ落としてしまうほど膨れ上がっている・・・

どうだ。

憎悪の感情を、捨ててみようと思わないか？」